

国産初戦闘機の開発生産

川島 順 予科21-7
(越谷市) 航空7-1

防衛省の長年の念願である国産初の第5世代ステルス戦闘機の実現が間近になった。

1980年代に当時の日米貿易摩擦に端を発したアメリカ合衆国の政治的問題が絡み、当初、F2の次期支援戦闘機FSXの開発はエンジンのライセンス生産を前提とした国産開発であったが、アメリカの横やりにより、F16戦闘機をベースとした日米共同開発に押し切られた。

さらに、現在は、米、英、欧、露、中などの軍事大国では、主力戦闘機の開発と配備は、ステルス性と高運動性能を備えた第5世代戦闘機に移っている。

日本は、アメリカのステルス戦闘機F22を導入する計画であったが、アメリカ議会の反対により、2009年に断念した経緯がある。

そのような背景の基に脚光を浴びてきた日本初の国産ステルス戦闘機は、防衛省技術研究本部が三菱重工業を主契約企業として開発を行っている先進技術実証機(ATD-X)であって、通称「心神」と呼ばれている。

ATD-Xは2009年から実機の開発が、2012年から試作機の組み立てが開始され、本年1月に試験飛行の予定であったが、エンジン出力制御のレバー位置の認識装置が正常に作動しなかったためソフトウェアの改善と、空中でエンジンが止まった時に自動的に再始働させるオート・スプールドア

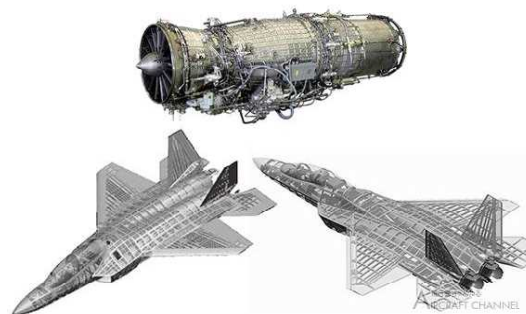
ウン再始働機能を新たに装備するために4月以降に先送りされることとなった。

2015年度の概算要求では、6年分の総事業費392億円を上回る412億円を盛り込んでおり開発を大幅に加速させる構想である。

本機は双発機で全長約14メートル、幅約9メートル、高さ約4メートル。炭素繊維でできた電波吸収素材を機体に用い、レーダーに映りにくいステルス性能を備えている。因みに、本機は米国のF22の全長約19mに比べて非常に小型である。

搭載エンジンは株式会社IHIが開発したXF5-1で、アフターバーナーを備えたターボファン方式のジェットエンジンで、推力重量比8程度で、2基搭載時に推力合計10t程度を発揮する。

本実証機の開発に成功し、国産戦闘機の開発に対する政治的・財政的な妥当性が認められれば、2018年(平成30年)頃、政府による正式な決定を経て国産戦闘機の開発が開始されることになる。



XF5-1エンジンと機体の設計図



国産ステルス実証機 ATD-X

防衛省では、ATD-Xの試験飛行で得られるデータを基にして、第6世代の戦闘機として、i3 FIGHTER の開発を視野に入れている。

第6世代戦闘機 i3 FIGHTERは、次世代ハイパワー・スリム・エンジン、撃てば当たるクラウド・シューティング機能、従来のレーダーでは探知できない敵ステルス機を早期発見するカウンタ・ステルス機能等を備えている。しかし、開発段階で5～8000億円規模の予算が必要となる見込みである。

一方、アメリカでは最新鋭UFO型反重力戦闘機TR-3「Bastra」が話題を呼んでいる。

この戦闘機は、巨大な三角形をしており、核燃料式の反重力戦闘機で、ロズウエル事件（1947年7月アメリカのニューメキシコ州ロズウエル付近で墜落したUFOが米軍によって回収されたという事件）で墜落したUFOを基にして作られたと云われている。TR-3Bの燃料は核燃料であり、大気圏の突入や、高々度からのEMP攻撃（電磁パルス攻撃）を行うことが可能である。

このような途方もない戦闘機が既にタリバン地区の攻撃に使用されているといわれているが真偽の程は定かではない。



米国の最新鋭反重力戦闘機 TR-3B